

江戸東京博物館友の会会報

目次

新春特集 明治初期、「うさぎ」は人気者! 1 ~ 3	見学会「房総のむら見学と歴史体験」(バスツアー) 7
新年祝辞 江戸博竹内館長/友の会松原会長 3	えど友サークルだより 8
友の会セミナー「江戸庶民の生活と広場の賑わい」 4	会議・会合日誌 8
両国駅構内での「会員が選ぶ東京新百景写真展」 5	えど友プラザ「皆中稻荷神社と大久保鉄砲百人組」 9
江戸博クリップ「江戸東京博物館の安全管理」 5	落語で江戸散歩...⑯【孝行糖】 10
見学会「広重『名所江戸百景』周辺探訪—その3 (両国橋上流隅田川周辺)」 6	催事案内 11 ~ 12
	会員優待のお知らせ 12

新

明治初期、「うさぎ」は人気者!

春

—江戸博・斎藤優美学芸員に聞く—

特

集

あけましておめでとうございます。明治時代の初め頃、今年の干支である「うさぎ」がブームになっていたことをご存じでしたか? 平成 23 年 1 月 2 日(日)から 2 月 13 日(日)まで、5 階常設展示室で特集展示される「明治流行うさぎづくし」を企画された江戸博学芸員の斎藤優美さんに、うさぎにまつわるお話をうかがいました。うさぎは昔から身近な生き物ですが、はじめて聞くおもしろいお話もあり、あらためてうさぎと日本人との関わりに思いをはせました。

出席者: 斎藤優美(江戸博・学芸員)
聞き手: 松原良(友の会会長)
大澤憲一(事業部会)
佐藤美代子(広報部会)
大屋のり子(総務部会)
司会: 福島信一(広報部会)

特集展示の概要

福島 最初に、「明治流行うさぎづくし」はどのような展示になるのか概略を説明してください。

斎藤 明治初期は外国からさまざまなもののが輸入されましたが、その中に飼いうさぎがありました。日本ではなじみのない毛並みのうさぎに人びとは関心を寄せ、明治 5 年頃、うさぎ人気に火が付きました。このうさぎブーム期には、兎絵や兎番付といった刷物が多く出版されました。江戸東京博物館では、平成 21 ~ 22 年にかけてうさぎブーム関連資料を収集してきました

で、卯年である平成 23 年 1 月にまとまった形で展示したいと考えました。

うさぎブーム

斎藤 うさぎは白くて目が赤いというのが一般的なイメージでしたが、明治のうさぎブームでは、珍しく美しいうさぎもてはやされました。外国品種では飽き足らず、さまざまな種類をかけ合わせて、珍しい模様をつくろうとする風潮も現れました。特に憧れ的となつたのは、「黒更紗」という白い毛に黒いぶちの入ったうさぎで、今回展示する兎番付「全盛兎別品競」にも描かれています。兎番付には珍し

く、多色刷りなので、白い毛に模様のあるものや、はっきりと模様が出来るものなど、当時好まれたうさぎを見ることができます。

うさぎ熱は過熱し、相当な高値で取引されました。黒更紗はピーク時には何百円もの値が付けられ、模様がきれいな雄は 2 ~ 3 円ほどの種付け料をとることができました。うさぎは繁殖力が強いので、投機目的でうさぎを飼う人びとも現れました。東京では「兎会」という取引きの場が生まれましたが、東京府からたびたび勧告されてしまうほど、人びとはうさぎに熱中しました。

ところで、このブームは江戸時代の人びとの感覚に通じる部分があります。江戸時代、見世物のひとつとして、ラクダとかゾウなど珍獣がもてはやされました。見ると病気が治る、厄払いになるとと言われたのですが、明治のうさぎも同じように言われたようです。また外来種と在来種を掛け合わせて新し



▲斎藤優美学芸員

い品種を生み出すのに市場が躍起になつたために、いろいろな種類のうさぎが生まれました。江戸から明治にかけて、朝顔や金魚の珍しい種をつくりだすブームが何度か起きていますが、どこかに同じ感覚があるのではないか。

うさぎブームの終焉

齋藤 うさぎブームがあまり有名でないのは、きわめて短期間で終わつたためと思われます。うさぎの取引は待合茶屋や料亭などに好事家があつまる「兎会」で行われ、高額で取引されました。しかし破産する者が出たり、詐欺事件や傷害事件が起きるなど、加熱の度が過ぎたため、東京府は明治6(1873)年12月、うさぎ1羽につき月1円の税を課すという旨の布達を出しました。ご丁寧に、隠したら2円の罰金付きでしたので、うさぎを飼っていた人びとはとても慌てました。たいへんな高値で取引されていたうさぎは急激に値下がりし、業者はうさぎを手放さざるを得なくなりました。このときの『新聞雑誌』の記事に、「税金に驚いて打ち殺すもあり、川々へ流し棄てるもあり、猶、陰に床下に隠すもあり…」と、人びとの慌てぶりが書かれています。結局、うさぎブームは明治5(1872)年から、兎絵などがたくさん刷られた6年までのわずか2年ほどで終わってしまいました。

松原 何百円というのはすごい値段ですね。

大澤 どのくらいの値段をイメージすればいいんでしょう。

齋藤 米価で比較するとし

たら、ざっくりとですが百円が百万とか二百万とかになるでしょうか。

松原 物価で比較するのはむずかしいところがありますが、いずれにしろ、すごい値段ですよね。



▲大澤憲一さん



▲兎絵「山参り強気情」

齋藤 こうしてみると、税金が月1円というのはすごいですね。儲けようとしている人は何羽も飼っているわけですから、業者が驚いてやめてしまうのも無理ないです。

珍しいうさぎ

福島 「さらさ」というのはどこの国のうさぎなんでしょう？

齋藤 先ほどの「全盛兎別品競」には、「ごまさらさ」という品種について英國と書いてありますね。しかし、「黒更紗」が外来種を指しているのか、在来種との交配種なのかについては、はつきりとしておらず、調べているところです。

うさぎは食べなかつた？

福島 ブームがこんなに短い期間とは思いませんでした。食用にはしていなかつたのでしょうか？

齋藤 うさぎブームの時は、うさぎはペットであり投機対象でした。しかし、一気にブームが過ぎ去ったあと、処分に困ったうさぎを食用に回す風潮も現れました。明治6年12月には神田で大火事が起きたのですが、焼け跡では「しめこ鍋」といううさぎ鍋を売る商売も出たそうです。

大澤 うさぎの吸い物もありますね。元旦に將軍にお目見えする御三家、御三卿にうさぎの吸い物を出すのが徳川將軍家の恒例だったとか。

齋藤 うさぎは鳥と獸の中間の動物、という解釈がなされ、四足が忌避された時代でも、うさぎは食されていました。また、『本朝食鑑』には、うさぎの肉は出産を軽くする、胞瘡に効くとも書いてありますね。一方で「子どもの口が欠ける」などといって、妊婦がうさぎ肉を食べることを忌避した地域は全国的にあります。

大澤 うさぎの肉は癖があると聞きましたが。

松原 戦後食べたことがありますが、そんなに癖はないですよ。

大澤 兎と大根を合わせて食べるというのを聞いたことがあります。

大屋 外国では肉の臭みを消すためにワインで煮るとか聞きました。

齋藤 投機のうさぎブームが収まった明治後半からは食用とか毛皮をとるために飼われたようです。牛肉や豚肉よりもおいしいと書かれた本もあります。

イメージとしてのうさぎ

佐藤 因幡の白うさぎ、かちかち山とかうさぎはよくでてきますが、うさぎはやっぱり白いイメージですね。



▲佐藤美代子さん

齋藤 私は子どもの頃、因幡の白うさぎの話でうさぎが泣きすぎて赤い目になつた、と聞いたことがあります。原典にそんな話はありませんし、その時代に赤い目のうさぎはいませんでした。「しろ」というのも、色ではなく「素」という字が本来で、音のイメージから、今日私たちは白うさぎと認識するようになったのでしょうか。赤い目のうさぎは日本白色種という種類ですが、明治の兎絵では、黒ぶちのうさぎでも目が赤く描かれています。

新年祝辞

江戸東京博物館 館長 竹内 誠

新年おめでとうございます。

最近、いろいろな機会に、「江戸博友の会の会員になりました」と声をかけていただくことが多くなり、温かい応援のお言葉にたいへんうれしく、感激しております。

本年も当館のモットーである「日々生々発展する博物館」をめざし、具体的な運営を「安全安心で (Safety)、だれにもやさしい (Service)、感動する (Sense of Wonder) 博物館」の 3S 方針のもと、がんばってまいります。

本年もよろしくご支援・ご鞭撻のほどお願ひいたしますとともに、江戸博友の会のますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

新年祝辞

江戸東京博物館友の会 会長 松原 良

明けましておめでとうございます。会員の皆さま方にとて今年も輝かしい1年となりますようお祈りいたします。

昨年はセミナーなどの各種事業やサークル活動に多数の皆さまのご参加をいただくとともに、創立10周年にあたり多種類の「10周年記念事業」を展開してきました。中でも「会員が選ぶ東京新百景」の写真展は両国駅のご協力もいただいて来場者2,000名を超える大盛況でした。また、「文政町方書上翻刻」事業も江戸博ご指導のもと順調に進んできました。

本年も引き続き各種事業を活発に展開してまいりますので、「会員自らが参加し創造していく会」となるよう、皆さまの積極的なご参画を期待いたします。

月とうさぎの組み合わせからもわかるように、日本では、うさぎは神の使いというイメージがあり、更に江戸時代には、繁殖力が強いうさぎをお産の縁起物や子供の神様に見てきました。疱瘡絵の題材にもされています。また、今回の展示では、うさぎがあしらわれた雛道具も展示します。

大澤 疱瘡絵というのは非常に印象深いですね。大変な病気だったので子供の命を助けたいというのがよく現れていています。

齋藤 江戸時代の都市部では、うさぎはその辺にいる生き物ではありませんでしたが、イメージとしてはよく描かれていました。特に、月や波の図柄と組み合わせられました。うさぎと波の模様は、火除けのまじないとしてよく描かれたようです。

佐藤 どうして波とうさぎで火除けになるんでしょうね。

齋藤 波とうさぎの組み合わせの由来については諸説ありますが、謡曲「竹生島」に「月海上に浮かんでは兎も波を走るか…」というくだりが有名です。また、宋から帰る大應國師の船が嵐に見舞われた際、白うさぎが波の上を走り、道を開いたという説話もあります。また、うさぎと波の意匠が火伏せに用いられるようになったゆえんは

明確ではありませんが、やはり波(水)の関連ではないでしょうか。うさぎそのものと火の関連については、鹿児島県桜島に、うさぎ狩りをすると火山が爆発するという俗信が存在するようです。いずれにしても、うさぎ=波>火という関係性が、日本人の観念に存在していたといえますね。

大屋 因幡の白うさぎと関係があるのではないでしょうか?

齋藤 そうでしょうね。研究者の赤田光男氏は、月・波・うさぎの組み合わせについて、因幡の白うさぎを素材に「ワニを排除し、代わりに月を登場させることで、うさぎを不幸の象徴から奇瑞の象徴に転化させた」と述べています。*

大屋 はっきりは覚えていないのですが、建築や漆の箱などにもその模様を見たような気がします。

齋藤 実は、うさぎは甲冑など武具のデザインにもよく使われました。耳が良く、俊敏なうさぎで、武将は縁起をかついたのです。江戸博にもうさぎをあしらった兜があります。

大澤 江戸時代のうさぎはペットとし

て飼われた実績はありますか?

齋藤 錦絵に描かれている例もあり、全くなかったわけではないと思いますが、一般的に広まったのは、やはり明治になってからです。

松原 外来種を入れたところから始まったわけですね。

齋藤 特に江戸っ子は新しもの好きですからね。

大澤 税金がかけられなければ、もっと交配が進んで多種のうさぎができるかもしれませんね。

齋藤 加速した可能性がありますね。

『風俗画報』には、三毛うさぎの交配に成功した人がいて、非常に値段が上がり、増えすぎていた黒更紗の値段が下がったという記載がありました。

福島 今日はうさぎについてはじめて聞くようなお話を聞かせていただきました。

実際に錦絵や兎番付を見るのが楽しみです。どうもありがとうございました。



▲福島信一さん

【記録】文・写真：広報部会・中村貞子

*赤田光男『ウサギの日本文化史』1997、世界思想社

「江戸庶民の生活と広場の賑わい」

講師 小林信也さん（川村学園女子大学講師・文学博士）



今回は江戸の町へ皆さんをお連れしようという企画ですが、250年前にさかのぼるのにタイムマシンは未開発です。古文書などの文字資料や錦絵などの図像資料を駆使して、行きたい時代の行きたい場所に旅行するのが歴史学の醍醐味です。これからそういう歴史研究のテクニックを使って江戸の町に皆さんをご案内いたします。江戸の「広場」には、この時代、道路の拡張部分や防災用の明地・お寺の境内の明地などがあり、賑やかに人々が集まりました。その広場にタイムスリップする方法はいくつかありますが、今日は「江戸名所図会」というものを利用して、飛んでいってみようかと思っています。これは斎藤月岑・編集、長谷川雪旦（唐津藩小笠原家の御用絵師）・挿絵のビジュアル版ガイドブックで当時のベストセラー。絵も精密な描写で、江戸の土産物としても利用されていたようです。また外国人の日本土産としても日本を紹介するのには最適なものでした。

江戸の広場めぐり

では最初のツアーとして現在この江戸東京博物館のあるご近所の両国橋広小路へ行ってみようかと思います。両国橋の橋詰広小路は江戸屈指の盛り場（両国・上野山下・浅草奥山が三大盛り場）といわれ、江戸一の賑わいでした。まず橋を渡り終えて見えるのは格子模様の屋根、床無し葭簀張りは水茶屋、その裏に桟橋があり、舟に乗り川あそびができるという良いものがありました。その奥に小さな屋根がずらりと並んでいる場所は髪結床が有名で、20～30軒ほどありました。こうしたかたちの露店一般的の名称が「床店」で、これが床屋の語源です。橋を渡って葭簀張りの長細い小屋に行き当たるとそこは「土弓」（矢場ともいわれる）お遊び所で、矢が当たると「あたりー」

の声と共に太鼓が鳴らされ、歌舞伎ではその太鼓の音だけでこの場所が暗示されるほど人々に知られた空間でした。女性との会話が楽しみな色気ある場所でもあったようです。高い櫓は軽技興行、幟のある大がかりな小屋は芝居などの芸能興行です。もうひとつ広場を構成している要素は様々な物品販売をする「床店」です。これらがぐるりと興行地のまわりを取り囲み、江戸一の盛り場を演出しました。

次に上野山下に行ってみようと思います。寛永寺グループの下寺が山の東下に11カ院ほど一列に並んでいますが（後にJRの上野駅になる）、この南側のあたりに曲芸や物まね・淨瑠璃の小屋や「土弓」「茶屋」「曲馬」がありその通りの向こう側に「床店」がおよそ100軒以上並んで多くの庶民で賑わっていました。

「床店」といえば江戸橋広小路もいたものでした。日本橋川にかかる江戸橋界隈には土弓場などもありましたが、多くの「床店」が溢れ、なんとその7割が紅白粉などの化粧品やアクセサリーを売る小間物屋です。ところがお客様の多くは男性だったと思われます。最近の女性グッズを売る繁華街といえば渋谷・原宿でそこに多くの女性が買い物をしている風景が目立ちますが、この当時この場所の買い物客はビジネスで来た商人などで、仕事帰りに土産としてそれらを買い求めたのです。参勤交代などで国に帰る武士も多くみられます（食料品は土産としては持ちが悪く不向きでした）。

次に行くのは柳原土手通りです。流れている川は神田川、神社を背にして描かれている「床店」で売られているのは古着です。道場通りの若侍がエロ本を物色する古本屋があつたりしますし、古道具を商う床店などが雑多に並んでいます。さて柳原というと「売春」の場所としても有名です。神田川の河

川敷になっている所ですが、夜になると本所の辺りから「夜鷹」がやってきます。

広場に生きる人々

それではこれから、このような盛り場で働いている人々について考えてみたいと思います。まず柳原の古着屋さんはいかさま商売なのか。今までの研究では柳原はもっぱら怪しい場所であるといわれ、そのいかがわしさを構成している要素として古着屋がある、下等な飲食店がある、乞食がいる、夜になれば売春が行われている、というわけです。しかしそれも特段「怪しげ」の理由にはならないと思います。中でも古着の件ですが、川柳に「禪が頭巾に化ける柳原」というものがあり、大新聞の有名コラムでも引用されるほど柳原の古着は怪しげなものとされていました。しかしこれも新発見の資料などによりますと、プロの商人たちの取引が中心であったことがわかります。そんな場所に目利きのできない素人が紛れ込んできて、着られない物を買わされたぞ、騙されたーと騒いだということで一概に怪しげとはいえないのです。

もうひとつ、上野山下で働いている男の子の話がありますが、これは家の事情で現在でいうと中学生位の年齢の男の子が病気の母親を助けて床店を守っていき、表彰されたというものです。つまり江戸の盛り場とは遊びだけでなく基本的には生きていくために自分の生活を成り立たせている大事な場所でもあったのです。今日は皆さんを江戸の広場の世界にお連れしましたが、ただただ楽しいだけの所ではなく、大都会で何とか頑張って生きて行こうとした人々の貴重な生業の場であった点が非常に重要です。

【記録】文：広報部会・松田悠美子
写真：同・佐藤幸彦

両国駅構内の「会員が選ぶ東京新百景写真展」 —来場者2千名を超す大盛況のうちに終了—

平成 22 年 11 月 2 日から 7 日まで、JR 両国駅構内「3 番線連絡通路」で開催の『東京新百景・写真展』には連日大勢の来場者がおり、最終日の 7 日には累計 2 千名を超え、午後 3 時に“終了”的看板を掲げたときは 2,096 名に達していました。

約 1 年がかりの事業『東京新百景』でしたが、この写真展の日程を固めたのが 2 月 5 日の会合時でしたから 9 カ月も前のことになります。その頃は随分先のことだと思っていたのですが、始まってみますとあっという間に終わってしまいました。

開催前日の 11 月 1 日には、広報部会員総出で額に入れた 100 枚の作品をゼムクリップで吊るしました。クリップが動かないようにセロテープで

留め、できるだけ額の高さや、額の相対位置のバランスをとりましたが、上に通した針金のたわみや連絡通路を吹き抜ける風のために会期中絶えず修復が必要でした。幸いにも入場された方々はそのようなことには一切構わず、作品自身を鑑賞していただいたと思っています。

初日は、来ていただいた入賞者 6 名の表彰式から始まりましたが、2~3 日は持つだろうと 200 枚用意した「作品一覧」のビラが午後早い時間に残り少くなり、慌ててコピーに行く始末でした。こんな状態が連日続いたのです。そして、誰もが一番入場者が多いのは初日だろうと言ったのですが、それも間違っていました。初日は 6 日間で一番少なく、282 名だったのです。

大盛況に終わった理由は、いさかオーバーな表現ですが、「天のとき、地の利、人の和」に恵まれたからだと思います。「天のとき」—6 日間ほとんど晴天が続き天候に恵まれました。

「地の利」—会場は乗降客が絶えず流れている両国駅構内です。そして「人の和」—この絶えず流れている乗降



▲写真展会場風景

客の流れを少し変え、会場に呼び込んでくれた担当者、受付に座り入場のあるたびに“正”の字を一心に書き込んだ担当者。6 日間にわたって、総務部会、広報部会の大勢の部会員がいしかわり、たちかわり交代していただいたお蔭です。それに両国駅長はじめ駅員の皆さんのが大変親切に接していただいたことも忘れることができません。

このように大変多くの人々から暖かいご支援・ご協力をいただきましたので、初めての『写真展』でしたが、成功裡に終わらせることができました。どうもありがとうございました。

【報告】文：広報部会・福島信一
写真：同・笹川道央



▲写真展会場入り口

「江戸東京博物館の安全管理」

管理課

はじめまして、今年 4 月から管理課に異動してきました、林と申します。事務職でありコラムの執筆経験がなく、拙い文章ではありますが、ご容赦ください。前所属は、「東京芸術劇場」管理課で、テナントの管理運営と消防関係を含む施設管理を担当していましたが、実は平成 10 年から 3 年間「たてもの園」の管理係にいました。まだ友の会は無く、ボランティアを立ち上げたばかりであり、その運営に携わり、「房総のむら」への見学や本館に話を

伺いにいった思い出があります。さて、現在私は、館の施設管理とコンソーシアムの窓口を担当しています。

今回は、施設の消防関係の話をします。江戸東京博物館は消防法上では「特定防火対象物」に区分されます。これは、不特定多数の人が利用するため、災害発生時に大きな被害が発生する恐れがあり、一般の建物より高い安全性を求められています。例えば、大規模でハイグレードの消防設備や高度な消防技術・知識の有資格者で構成する自衛消

江戸博クリップ

林 誠一郎

防隊の設置等が求められ、法定点検も消防設備、建物、防災の各点検を毎年実施する義務があります。このように、当館は高度な安全性を有する施設ではありますが、災害時に重要なことは、それを運用する警備員・設備員のみならず、館に携わる全員が一致協力し、対応することです。今後とも、努力してまいりますので、友の会の皆様もご協力の程、お願いします。

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

「広重『名所江戸百景』周辺探訪—その3」

(両国橋上流隅田川周辺)



朝夕、寒さを感じる晩秋の昼下がり、「両国」駅に集まった約210名の会員は企画展「隅田川」の江戸の人々と同じように、隅田川の水辺に親しみ散策しました。

両国駅から両国橋へ

「両国」駅から回向院への通りには歴代の横綱の手形が刻まれた土俵入りの石像が立ち並び、突き当たりの回向院の門の隣にある元両国国技館跡の説明を聞いた後、両国橋を渡りました。歩道・欄干・柵には土俵・軍配・国技館など相撲にちなんだ装飾が施されています。「両国橋大川ばた」図に描かれた両国橋は今の橋より約50メートル川下に架けられていたので、橋の上や堤防の外側ではよくわかりません。隅田川テラスに下りて川を間近に見ながら説明を聞きました。川向こうの御蔵橋跡の水門や百本杭があった場所なども確かめることができました。両国広小路の碑の脇の道を入ると、神田川の入り口にある柳橋です。江戸時代には船宿が集まり、「両国花火」図は柳橋たもとの船宿から眺めた花火風景です。

隅田川テラスからの眺め

隅田川テラスに下りて浅草御蔵の大さを感じながら歩きました。現在は公園化され、海鼠壁や大名の家紋や浮世絵で装飾されています。「浅草川首尾の松御暁河岸」図の首尾の松は御蔵の中ほどにありました。今は黄色の蔵前橋のたもとに七代目の松が碑とともにあります。橋のそばにある東京都下

水道局は蔵前国技館跡に建っています。御蔵は今の草色（緑）の厩橋手前までありました。テラスを歩いて対岸を見ながら、「御暁河岸」図の御暁河岸の渡しの位置の説明を受けました。

駒形堂から隅田公園へ

テラスを駒形橋に向かって歩くと川岸は屋形船の船着場になっているので江戸の人々と同じように隅田川の舟遊びの気分を少しだけ味わうことができました。水色の駒形橋のたもとの赤い駒形堂にお参りしました。昔この辺りは船着場で浅草寺参りに訪れた人々はここで上陸して駒形堂にお参りし観音堂に向かったそうです。「駒形堂吾嬬橋」図の駒形堂は白く川の方（今は反対）にお堂が向いています。当時は船の上からお参りする人もいたそうです。図の中の紅屋の竿先の赤い布や空を飛



▲もうすぐ終点業平橋

爽と建っています。隅田川沿いは隅田公園として整備され、もと水戸家下屋敷もあり、関東大震災まで水戸徳川家の屋敷として使われていました。北側に牛嶋神社があり、撫で牛を撫でて悪いところが直るよう祈りました。

隅田川土手を歩く

隅田川の土手に戻ると「吾妻橋金龍山遠望」図が描かれた辺りを眺めることができます。川の向かい側もビルが立ち並び、金龍山浅草寺の姿を見ることが困難になっています。言問橋の上からもう一度浅草寺を探しましたが見えませんでした。もう少し上流に歩くと向かい側に待乳山聖天が見えています。山谷堀跡の暗渠も見え「待乳山山谷堀夜景」図の描かれた場所（竹屋の渡し）に立ち、「たけやー」と叫んでみたい気持ちになりました。土手から降りると三廻神社の鳥居が見えてきます。三廻にあやかり三井越後屋が信仰したことから、三井、三越にゆかりのものが多く残されています（屋敷神社・ライオン・歌碑）。

あとはスカイツリーを目指して終点「業平橋」駅へ歩くだけです。スカイツリーはますます高く大きくなり見上げてばかり、江戸時代から急に平成に連れ戻された気分で歩き終えました。



▲駒形堂にて

ぶほととぎすの色っぽい話とは全然違う風景に変わったなとしみじみと感じました。

真っ赤な吾妻橋は浅草寺の雷門の色を表しているそうです。吾妻橋のたもとの水上バスの発着所の長い行列を見て、現代の隅田川の舟遊びは楽しむのも大変だと感じました。吾妻橋を渡り始めると佐竹家中屋敷だった付近に、ビルのあわをデザインした金色のオブジェを屋上に載せたアサヒビール本社のビルと墨田区役所のビルの間から建設中のスカイツリーが派手なデザインのビル群に負けない姿で見えていました。区役所の敷地に勝海舟の銅像が颪



▲隅田川テラスを歩く

【記録】文・写真：広報部会・佐藤美代子



「房総のむら見学と歴史体験」 (バスツアー)



例年はない酷暑がやっとおさまると思ったら、今度は朝夕の小雨という不順な毎日が続き、最も心配された天候もこの日ばかりは久しぶりの好天に恵まれ、バス2台で90名弱の会員が参加、爽やかな一日を楽しむことができました。

商家の町並みと武家屋敷

まず“体験博物館”と銘うつた「房総のむら」の正面「大木戸」にバスが到着、最初に目を見張ったのは、見事に再現された江戸時代の町並みでした。

総合案内所に使われている総屋の前でボランティアガイドによる説明があり、二階から時代劇のワンシーンを思わせる俯瞰を楽しみました。続いてめし屋、そば屋、小間物屋、呉服屋、辻広場、酒燃料の店、薬の店、川魚の店、瀬戸物屋、菓子屋、お茶の店、本瓦版の店、紙の店、細工の店、畳の店、稻荷、木工所、鍛冶屋と道の両側に並ぶ町並みの一軒一軒を目で確かめながら歩きました。

「商家の町並み」は、香取市（旧佐原市）などに残る古い町並みを、特に外観を重要視し、資料に忠実に再現したもので、映画などのロケにも度々利用されているとのことでした。

再現建物の内部は、それぞれ伝統的な技術や生活様式を体験する催しが行なわれていて一部改造を加え、懐かしい味、匠の技などに実際に触れる役割を持たせていました。

「商家の町並み」の見学を終え町外



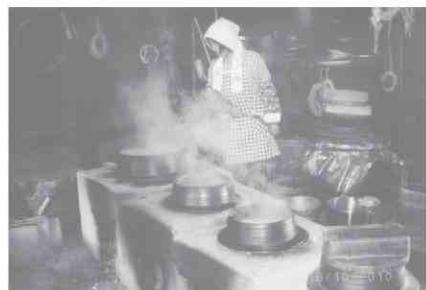
▲時代劇を見るような商家の町並み

れの橋を渡り、当時の輸送手段として重要な堀割りとその両岸の石積みや流れに浮かぶ小舟を見ながら、川筋に沿った道を行くと、佐倉藩の中級武士の武家屋敷の前に出ます。道端には藍の群生した草叢がありました。

腕木門を構えた武家屋敷は、約220坪の敷地、生垣に囲まれた主屋の他、井戸小屋、鞘堂、菜園などが再現されています。小納戸部屋番90石取りの田島家の屋敷の再現ということです。武士の生活の一端を知ることができました。

上総の農家では味噌づくり

武家屋敷を出て「上総の農家」に向かいます。村境などによくあるように、道を横切って“魔除けの藁細工”が張られていて、見上げる空に異様な



▲上総の農家の土間で味噌づくり

影を浮かべていました。立派な長屋門の前に広がる畠には、柿の木が実をつけ篠草に囲まれた畠に案山子の愛嬌のある姿がありました。長屋門を入ると大きな萱葺屋根の主屋が出迎えました。主屋の土間では女性達が味噌造りの最中、竈で赤々と燃える炎が印象的でした。主屋は安政4(1857)年建築の秋葉家の再現で、長屋門、土蔵、納屋、馬小屋、木小屋は市原市の内藤家の江戸末期の建築の再現とか。

農村歌舞伎の舞台、水車小屋など

上総の農家を出て「農村歌舞伎の舞台」へ、広いお祭り広場に面した大きな萱葺屋根の大舞台がどっしり構えて

います。香取郡大栄町に明治8(1875)年に建築され、地区の諏訪神社で拝殿として使われていた建物といいます。

次に「下総の農家」を訪れたあと、小道を下ると道端には、江戸時代末期の「水車小屋」が再現されていました。

古墳群と重要文化財の建造物

ここで一同、1時までに自由に食事を済ませた後、2班に分かれて風土記の丘エリアの古墳見学に出発しました。まず草木に覆われた「みそ岩屋古墳」で方形古墳の石室を見学、続いて前方後円墳「岩屋古墳」のそばにある、崩れを防ぐためシートをかけた石室を見学しました。



▲移築された旧学習院初等科正堂

次いで、広い芝生の広場に面して移築再現された「旧学習院初等科正堂」を見学、明治32(1899)年建造の講堂、明治時代の貴重な建造物です。国の重要文化財に指定されています。

そして、発見された後に発掘調査が行なわれて、古墳が作られた当時の様子に復元した101号古墳を見学、西に傾きかけた日差しに浮かび上がった約100体の埴輪が並ぶ荘厳な風景を味わうことができました。遊歩道に沿い大小様々に点在する古墳群を眺めながら「風土記の丘資料館」、「旧御子神家住宅」(国の重要文化財)、「旧平野家住宅」(同)へと歩を進め、最後に明治期の「千葉県会議事場」の外観を再現した建物を見て、この日の全行程を終了、帰途につきました。

【報告】文・写真：会員・三田 陽一

◎活動概況

- ◆落語と講談を楽しむ会：10月26日(火)年1回の話合いがもたれ、年間活動の総括、会計報告のあと、新世話人として山内啓巳さん、島田昭さんを選出、今後1年間の計画を話合って取りまとめた。参加者17名。11月14日(日)深川江戸資料館小劇場に集合、アマチュア落語家による「楽笑会・第69回発表会」を鑑賞した。今回の月番でもある山内啓巳さんが太尾亭狸久の芸名でトリをつとめ「二番煎じ」を熱演、大喝采をあびた。参加者はメンバー以外の友の会会員を含め47名。
- ◆藩史研究会：10月8日(金)前月の国定美津子さんの発表を受けて、備中足守藩木下家の江戸菩提寺で目黒区屈指の名刹「円融寺」をメインに近隣の神社仏閣などを訪ねた。参加者は11名。11月12日(金)本年8月の土屋献一郎さんの発表を受けて古河を訪れ、古河総合公園(古河公方五代目義氏の墓所など)、永井路子旧宅、篆刻美術館、古河文学館、鷹見泉水記念館、古河歴史博物館、古河藩使者取次所などを見学、現地ガイド付きで古河の歴史と文化をたっぷりと味わった。参加者は16名。
- ◆古文書で『八丈実記』を読む会：10月14日(木)、10月29日(金)、11月11日(木)、11月26日(金)に例会を開催。参加者はいずれも各8名。
- ◆神田川を歩き楽しむ会：10月28日(木)、31日(日)に第12回として、西武新宿線「井荻」駅から中瀬天祖神社、妙正寺公園(妙正寺池)、妙正寺、妙正寺稻荷を経て妙正寺川起点の落合橋へ出て宮満寿人道橋まで妙正寺川に

沿って歩いた。途中、等正寺、銀杏稻荷、銀杏稻荷公園、交通厄除地蔵、鷺宮八幡神社、福蔵院などに寄り参拝・見学を行った。参加者は各38、24名。11月21日(日)、25日(木)に第13回として、西武新宿線「鷺ノ宮」駅から宮満寿人道橋へ出て新道橋まで妙正寺川に沿って歩いた。途中、若宮オリーブ公園、みはと公園、蓮華寺、八幡神社、育英地蔵、がんかけ地蔵、清谷寺、平和の森公園・平和資料展示室などに寄り参拝・見学を行った。さらに新道橋から近くの禅定院、明治寺(百觀音靈場)、密蔵院に寄り、見事な紅葉(特に25日は素晴らしかった)を楽しんだ。参加者は各25、44名。

- ◆『江戸名所図会』輪読会：10月18日(月)国定美津子さんの担当で、三又新大橋から三ツ橋を読み、みんなで話合った。参加者は19名。11月15日(月)国定美津子さんの担当で三ツ橋から隨見屋敷を讀んだあと、石川文夫さんの担当で伊勢大神宮から新橋について読み、活発な討議を行った。参加者は18名。



●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また新しいサークルの立ち上げ希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局 Tel.03-3626-9910

◆役員会

10月14日(木)17時開催。10周年記念事業の各計画、特に11月上旬の「東京新百景写真展」、12月「江戸の政治改革」セミナーの進行状況報告および確認をした。出席者11名。

11月11日(木)17時開催。10周年記念事業各計画の進行状況の報告、9月実施の神田川巡りは猛暑の中無事に終了。出席者11名。

◆事業部会

10月7日(木)17時開催。9・10月の事業報告、および今後の事業計画を決定。10周年記念事業の進捗状況の報告等をした。出席者21名。

11月4日(木)17時開催。10・11月の事業報告、および今後の事業計画を決定。見学会の報告、アンケート結

会議・会合日誌

2010 / 10 ~ 2010 / 11

果の確認等を行った。出席者21名。

◆広報部会

10月29日(金)14時開催。「会員が選ぶ東京新百景」の進捗、図録の作成状況、『えど友』59号担当、今後の編集ルールの確認を行った。出席者13名。

11月19日(金)14時開催。11月上旬の「東京新百景写真展」完了報告。予想以上の大盛況に終わった。『えど友』59号進行、「広報部会作業ガイドライン」の進捗確認。出席者11名。

◆総務部会

10月27日(水)13時開催。『えど友』

58号の発送業務、記念事業の報告・担当確認を行った。出席者12名。

11月24日(水)13時開催。次号の日程確認、記念事業の状況確認等を行った。出席者13名。

◆役員等候補者推薦委員会

11月11日(木)16時開催。本年度末で任期切れの現役員の後任を推薦すべく、第1回の委員会を開き、委員長に玉木達二氏を選出、今後推薦手続きを進めていくこととした。出席者9名。

◆文政町方書上翻刻プロジェクト

10月7日(木)、10月21日(木)、11月4日(木)、11月18日(木)A、Bグループとも例会開催。出席者は(A)各9名、10名、9名、9名(B)各10名、10名、9名、9名。

えど友プラザ

～友の会会員の投稿欄～

皆中稻荷神社と 大久保鉄砲百人組

野川 陽一

「新宿」駅のすぐ隣、山手線「新大久保駅」の改札口を出ると、東西に大久保通りが走る。駅を出て左手の「大久保」駅方向へ2、30メートル行くと、左側に「^{かいちゅう}皆中稻荷神社」がある。間口が狭い上、入口に交番と祭礼時のお札売場があつて、うっかりすると通り過ぎてしまいそうである。だが奥行きは結構深く、神社を取り囲む木々がうつそうと茂っている。新宿・百人町にあるこの神社、マスコミにも登場して存じの方も多いと思う。我が家からも近く、子供の頃はお祭りともなると、お小遣い片手に境内の屋台を回るのが、最大の楽しみだった。

社伝によれば、室町時代の天文2(1533)年9月、武藏国^{つつじ}躑躅ヶ丘(百人町)に稻荷大神をお祭りしたのが始まりだそうで、以来この地の総社として信仰されてきたという。御祭神は宇迦之御魂大神で、穀物・農耕の神様である。

神社がある「百人町」という町名は、この辺りに幕府の「鉄砲百人組」組屋敷があったことに由来する。天正18(1590)年8月、徳川家康は江戸入府に当たり、腹心の内藤清成に鉄砲百人組を預け先陣とし、今の新宿1・2丁目周辺に駐屯させ、北条氏残党への防

備と警戒に当たらせた。その後慶長7(1602)年(慶長6年の説も)に家康は、改めて内藤清成に与力25騎・同心100人を預け、四組ある鉄砲百人組の一角を担わせた。大久保百人組(正式には二十五騎組、伊賀組との説も)の成立である。寛永10(1633)年頃になると、江戸城城郭の整備や軍政の統一が進み、鉄砲百人組も老中、のち若年寄の指揮下で、旗本が統括するようになった。また陣屋駐屯から組屋敷定住となり、大久保百人組は今の新宿1・2丁目と百人町の地域に組屋敷を拝領した(一説では慶長7年に内藤清成の直訴で拝領との説も)。神社の敷地が細長いのは、この時の地割が皆細長い形だからのようだ。

ちなみに鉄砲百人組の任務は、ご存じ江戸城大手三之門の警備(二十五騎組・伊賀組・甲賀組・根来組の四組による交代勤務、「百人番所」が今も残る)や、將軍の寛永寺・増上寺・日光東照宮参詣、京都御所参上の護衛などである。

さて「皆中稻荷神社」という社名のいわれだが、こんな話が伝わっている。鉄砲組与力(同心?)が一所懸命練習に励んだが、思うように腕前が上がらない。ある夜思い惱みながら床に就いたところ、夢枕に稻荷大神が現われてお札を授かった。翌朝不思議に思いながら神社にお参りし、いつものよう 「角場」(鉄砲場)で撃ってみると、何と百発百中だった。これを見た他の同僚も、競ってお札を受けて撃つてみると、皆ことごとく的中したという。これが近郷近在に伝わり、願い事をする人が日増しに増え、いつしか靈験あらたかな「^{みなあたる}皆中稻荷」と呼ばれるようになったそうだ。

マスコミによりこの神社が一躍有名になったのは、「鉄砲組百人隊出陣式」(新宿区登録無形民俗文化財)であろう。往時の武具に身を固め、火縄銃を携えた行列が、法螺貝の音とともに神社をスタートし、町内各所で射撃を披露す



▲鉄砲射撃

る。幕末で途絶えたが昭和36(1961)年に再現され、西暦の奇数年の9月に行われている行事である。そのすさまじい轟音は迫力満点で圧倒される。

最後に、百人町一帯がつつじの名所だったのをご存じだろうか?『江戸名所図会』「大久保の映山紅(つつじ)」にある通り、百人町一帯にはたくさんのつつじ園があり、大名も庶民もよく訪れたようだ。つつじ栽培の担い手は「鉄砲百人組」の同心である。実戦が無く俸禄の上らぬ同心は、趣味と実益を兼ねてつつじの栽培に精を出した。明治になり一時衰退したが、明治30年代には再び名所として復活し、「大久保」駅まで臨時電車が出たそうだ。しかし宅地化の進行で、つつじは日比谷公園・箱根・館林などに売却され、今はまったくその姿を消した。

ちなみに新宿区の区花は、かつての姿を記念し「つつじ」である。

今や「皆中稻荷神社」は、韓国料理店が並ぶコリアンタウンの一角に鎮座し、くじ・賭け事・商売・合格などの祈願所となっているが、実はこんな故事情を持った神社なのだ。(写真も筆者)



▲皆中稻荷神社本殿

原稿を募集します

会員の投稿欄「えど友プラザ」への原稿を募集しています。名所めぐりの感想、趣味や所属サークルでのできごと、あるいは東京や江戸に関するご経験などを1,000字程度にまとめて事務局宛お送りください。採用分については記念品を差し上げます。なお、原稿はお返しません。

【孝行糖】



水戸様門前の今？ 後楽園東南の外

孝行糖

落語では著名人の一人の与太郎さん。その与太郎さんを「……親孝行の由、お上に聞へ、青縞五貫文を褒美に仕わす。以後、町役人・五人組で労つて面倒を見てやれ」とお奉行所から命ぜられ、町内の者が知恵を絞り、飴を売り歩くことにさせます。ご褒美を元に始めた飴だから「孝行糖」と名付けます。派手な身装に頭巾をかぶせ、小箱に飴を入れ、鉢と太鼓で囃しながら、♪チャンチキチン スケテンテン♪「孝行糖、孝行糖～。孝行糖の本來は梗の小米に寒晒し、榧アに銀杏、肉桂に丁字、昔々、唐土の二十四孝のその中で、老菜子といえる人、親を大事にしようとして、こしらえ上げたる孝行糖、食べてみな、美味しいよ、また卖れた、嬉しいね」の口上で売り歩きましたので、良く売れます。売れれば励みが出て、雨が降っても風が吹いても売り歩きます。ある日、江戸中で一番うるさいと言われた水戸様の御門先に出てしまします。門番が「御門前じゃ、鳴り物はまかりならぬ」とたしなめると、これに合わせて、♪チャンチキチン♪…、「静かにいたせ」には、♪スケテンテン♪とやって、六尺棒で打たれてしまいます。ちょうど通りかかった町内の者が一緒に詫びてくれて、



▲神田明神の門前の“天野屋”

やっと許されます。そして、嘶の落ちへとなります。

嘶では与太郎がどこに住んでいたのかは判りません。ですが水戸様の上屋敷からそんなに遠くない所だと、神田明神下近辺にしてみました。この辺りには、錢形の平次親分も住んでいました。きっと親切心に溢れた人が多く住む町内であったに違いありません。

今回はこの辺りから与太郎が叱られた水戸上屋敷までの道筋を辿ってみます。明神下ですから、やはり先ずは神田明神です。

神田明神

その正式名は神田神社。「明神さま」の名で親しまれています。社伝によれば、天平2(730)年に出雲氏族で大己貴命の子孫・真神田臣が武蔵国豊島郡芝崎村（現在の千代田区大手町・将門塚周辺）に創建したとのこと。その後、延慶2(1309)年に平将門を奉祀しています。江戸幕府が開かれると、幕府の尊崇する神社となり、元和2(1616)年に江戸城の表鬼門守護の場所にあたる現在地に遷座し、幕府により社殿が造営されます。以後、江戸時代を通じて「江戸総鎮守」として、幕府や町方からの崇敬を受けています。ここを出て本郷通りを隔てた南側の湯島聖堂に歩を進めます。



▲湯島聖堂内に建つ“孔子像”

湯島聖堂

幕府は儒学、とりわけ朱子学を政治の中に取り込み、教化政策の基本にします。三代将軍家光は、侍読の林羅山に命じて上野忍ヶ岡に学舎と書庫を建てさせます。その後、五代将軍綱吉によって元禄3(1690)年、ここに移転させられます。そして寛永9(1797)



▲小石川後楽園の“正面入口”

年から孔子堂関係を「聖堂」、教育機関関係を「昌平坂学問所」（昌平齋）と分け、学問自慢の旗本・諸藩士が集まって研鑽に励んだ学舎でした。そしてここは、幕末まで幕府の学問の中心でした。

ここから神田川沿い（外堀通りです）に歩くことにします。当時の風景は左はお堀、右側は武家屋敷でしたから、人通りなど減少になかったはずですが、ともかく聖堂を出て水道橋方向に進みます。

水戸上屋敷

水戸家上屋敷は、この水道橋交差点から北に春日町交差点、西に講道館、文京区役所、地下鉄丸の内線「後楽園」駅、中央大学理工学部、南に下つて、小石川後楽園、東に東京ドーム、後楽園遊園地を含む広大な土地でした。お屋敷の正門は神田川に面し、御三家で天下の水戸黄門様の異名を持つ光圀（副将軍）の屋敷でしたから、門番もその威光を笠に、うるさかったのでしょう。三代目金馬師匠は“こんな寂しい場所で”と言っています。ですが後楽園は庶民に解放されていたとも云われます。となれば、与太郎さんもお庭に入って見物していたかも知れません。現在、その一部が「小石川後楽園」として国の特別史跡・特別名勝に指定されています。

神田明神から小石川後楽園までを歩いてみました。メタボ体型ですのでチョット歩いただけで膝が痛くなり、腰に張りが出たようです。“オイ、チョット、腰に膏薬（こうやく）を貼ってくれ”、“どこに貼るのサ”、“こうこうと、こうこうと”。

【取材】歩いた人(文・写真)：

広報部会・岡田守弘

イラストを描いた人：同・松原良

古文書講座

第3期の日程

古文書講座の今年度第3期が始まります。申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内いたします。

◆入門編

- ・講師：小松賢司さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：1月12日（水）、2月2日（水）、3月2日（水）
- ・時間：A講座は10時30分～12時30分
P講座は14時00分～16時00分

◆初級編

- ・講師：田中潤さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：1月19日（水）、2月16日（水）、3月16日（水）
- ・時間：A講座は10時30分～12時30分
P講座は14時00分～16時00分

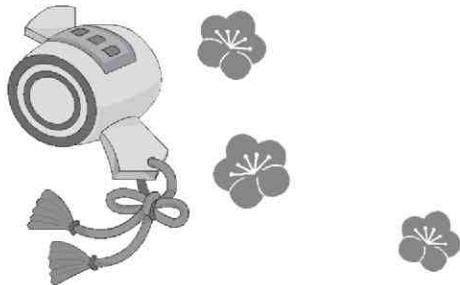
◆中級編

- ・講師：長坂良宏さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：※1月15日（土）、2月19日（土）、3月19日（土）
- ・時間：A講座は10時30分～12時30分
P講座は14時00分～16時00分

[※] ただし、1月15日（土）はA、P合同とし、
当日の10時～12時に実施とします。

- ・会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1,2
- ・参加費：各講座とも全3回1,500円（初回一括払い）

【企画担当責任者】上田太一（事業部会）



お知らせ

江戸博のミュージアムショップやレストランでは、友の会の会員証を提示することによって割引が受けられます。ただし、書籍を除きますが、ほかに細かい条件がつくことがあります。店頭での表示や告知はありませんので、自分の方から会員証を提示して割引を受け、「えど友ライフ」をお楽しみください。

また、江戸東京たてもの園はもちろん東京都庭園美術館、東京都写真美術館、東京都現代美術館など東京都歴史文化財団の各館でも、会員証を提示することによって割引が受けられます。細かい条件は各館により異なりますが、ご活用ください。

友の会セミナー

第101回「日本騎兵の父・秋山好古 ～東京陸軍士官学校時代から 習志野騎兵旅団長時代を中心に～」

講師 山岸良二さん

（東邦大学付属東邦中高等学校教諭、習志野市文化財審議会会長）

◆司馬遼太郎原作『坂の上の雲』が2009年より3カ年かけてNHKスペシャルドラマとして放映されています。主人公の一人、秋山好古は「日本騎兵の父」といわれる明治開化期の名将です。四国松山から上京した好古が、当時四谷にあった陸軍士官学校第3期生として入学、フランス留学、日清戦争、北清事変などを経てなぜ「騎兵の父」といわれるようになります。日本陸軍に世界有数の騎兵旅団を育成していくのか、騎兵旅団が設営された千葉県習志野に残る足跡などにも詳しく触れつつ好古の人物像に迫っていただきます。

○講師略歴：やまぎし・りょうじ

昭和26(1951)年東京生まれ。昭和49(1974)年慶應義塾大学文学研究科修士課程修了。専門は日本考古学。弥生時代墓制「方形周溝墓」研究が主要テーマ。その一方、考古学普及のための入門書執筆や講演活動、ラジオ・テレビ出演もこなす。著書は『邪馬台国を知る事典』など多数。
・開催日時：1月22日（土）14時～15時30分
・申込締切：1月11日（火）必着
・会場：江戸東京博物館・1階ホール
・定員：200名 同伴者可（はがきに氏名連記）
・参加費：会員500円・同伴者600円（当日払い）

【企画担当責任者】西村英夫（事業部会）

第102回「太田道灌紀行—「道灌がかり」「山吹伝説」「足軽戦法」を考える」

講師：尾崎 孝さん（太田道灌研究者）

◆東京国際フォーラムの太田道灌銅像、日暮里の道灌騎馬像など10体の道灌銅像から出発し、難攻不落の江戸城の「道灌がかり」を考察、次に、越生、高田馬場などの「山吹の里伝説」の史跡7カ所について、その真偽を論じていただきます。さらに、関八州を駆け抜けた太田道灌の古戦場をめぐりながら、30連勝の勝利の方程式「足軽戦法」について、古書とフィールドワークによる先生の考えを述べていただきます。多くの映像を使っての講演です。

○講師略歴：おざき・たかし

昭和15(1940)年生まれ、東大和市在住。東京外国语大学英米語学科卒業。千葉県立高校教諭、私立高校校長を経て、現在は自治会長など地域活動に専念。太田道灌の史跡（伝承の地を含めて）150カ所を探訪、「道灌紀行」を出版し、平成22年「日本自費出版文化賞入選作品」となる。江戸城再建を目指す会員。

・開催日時：2月26日（土）14時～15時30分

・申込締切：2月15日（火）必着

・会場：江戸東京博物館・1階ホール

・定員：200名 同伴者可（はがきに氏名連記）

・参加費：会員500円・同伴者600円（当日払い）

【企画担当責任者】内田勝元（事業部会）

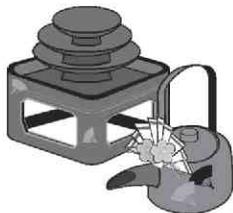
見学会

「江戸博常設展を見る」

◆事業部会では最近入会されたみなさまを主な対象に、常設展示室の見学会を年1回程度開催しています。江戸博の5、6階に設けられている常設展示室をもっと知って、その楽しさを味わっていただければと思います。当日の展示室の案内は、展示プランティアガイドにお願いしています(特別展は除きます)。案内時間は2時間ほどとの予定です。

- ・開催日：1月25日(火)12時45分集合
- ・集合場所：江戸東京博物館・1階ホール前
- ・申込締切：1月18日(火)必着
- ・定員：40名 同伴者可(はがきに氏名連記)
*申込多数の場合は新規入会者を優先します。
- ・参加費：無料(会員は6階入口で提示するため会員証を忘れず持参してください。同伴者は入場券を購入の上集合してください)。

【企画担当責任者】藤村武雄(事業部会)



お申込方法

*「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いない!

◆普通はがきに、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。

「往復はがき」の必要はありません。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。

◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。

◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。

◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1

江戸東京博物館友の会事務局

*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

*いずれも申込多数の場合は抽選となることがあります。

*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の水曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)にお願いいたします。

*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

乞う、ご期待! 1月2日から開催

●2011年NHK大河ドラマ特別展

「江～姫たちの戦国～」

会期 2011年1月2日(日)～2月20日(日)

休館日：毎週月曜日。ただし、1月3日(月)、1月10日(月・祝)、1月17日(月)は開館。

会員：一般 650円、65歳以上 320円、大・専門生520円

同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

*小学生、中学生は無料。高校生は65歳以上と同じ。

次回予告

●特別展

五百羅漢 増上寺秘蔵の仏画

幕末の絵師 狩野一信

会期 2011年3月15日(火)～5月29日(日)

休館日：毎週月曜日 ただし3月21日は開館、3月22日が休館。5月2日、16日は開館予定。

会員：一般 650円、65歳以上320円、大・専門生520円

同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

*小学生、中学生は無料。高校生は65歳以上と同じ。

企画展のご案内

好評開催中!

●企画展

「林芙美子と東京放浪」

会期 2010年11月23日(火・祝)

～2011年1月10日(月・祝)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

●次回企画展

「140年前の江戸城を撮った男 横山松三郎」

会期 2011年1月18日(火)～3月6日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室



会報<えど友>第59号

平成23年1月1日発行(奇数月1日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長) 副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、岡田守弘、深尾恵美子、福島信一、松田悠美子、中里弘子、内匠屋京子、 笹川道央、秋尾暢宏、今野君江、中村貞子、原盛年、藤原理子、佐藤美代子

発行：江戸東京博物館友の会

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910